



誌
季
能古博物館だより

撮影＝岡田信義（写団ふくおか所属）

ガリバン刷りの能古島

福岡市監査事務局長 大森 邦明

先日、赤茶けたガリバン刷りの小冊子を能古博物館にお送りいたしました。

もう四十年前前に私が部員をしていた市内のある中学校の歴史研究部の部誌で、このときのテーマは能古島。能古島の窯跡、鹿垣、古墳、牧の神社、白髭神社等つたない調査でしたが、能古島の主な歴史や遺跡を網羅したものになっています。海沿いの桜並木や島のうえの菜の花畑の道を息をはずませてたどったことが、鮮やかに思い出されます。

能古島の窯跡は、博物館内に見事に復元されました。能古島は、歴史のほかにも地質学上も大変おもしろいそうです。それから島内のクヌギ林にミズイロオナガシジミという蝶が生息していました。今はどうでしょうか。

こんなに多彩多様な能古島の歴史と自然を探索することを、エコロジーならぬ「ノコロジー」と名付けてみました。いかがでしょうか。みんなが能古島でそれぞれの興味で新しい発見ができたらずばうれしいと思います。

能古博物館が島の人々にささえられた全国でもユニークな島の博物館とします。ますます発展充実されることを心からお祈りいたします。

能古島の伝説

おさよ②

―前号までのあらすじ―

ある春の日の夕方、能古の沖を博多へ向かう一艘の廻船はひどい嵐のため遭難。翌朝能古の浜にひとり若者が倒れていた。おさよは、みんなの力を借りて、自分の家へ連れ帰ったが、医者から見立てでは若者の容体は容易なことではなかった。おさよは一睡もせず介抱を続けた。

それから七日ばかりが過ぎた。じつとおさよを見つめる若者の目には感謝の涙が光っていた。桜の花も散り、つじの頃となった。おさよと若者の明るい声が障子の外にも漏れていた。

若者は、北陸の能登のあたりの人であった。年は二十歳で、親兄弟もなく、こんどの船旅は、松前あたりは唐津で焼物を積むはずだったのだそうである。無一文の若者は、せめてものお礼にと、今まで渡り歩いてきた諸国の話をおさよに聞かせた。松前あたりのアイヌの人々の話。越

後あたりの深い雪の話。能登のあたりの波の華の話。時国様のすばらしい家の話。時には、やや顔を赤らめて歌う佐渡おけさなど。その能登訛りの誠実な語り口がおさよの心をとらえた。

麦の実るころとなった。

若者は、ようやく起きることができるようになった。しかし、まだ

船に乗ってその故郷に帰るなどということは無理であった。さらに、若者の気持ちとして、この

ままお世話になりっぱなしで立ち去るなどという行動

はできないことであった。若者は、故郷に帰っても親兄弟もいないことだし、せめてものお礼に、二、三年の間、ここで働かせてほしいと庄屋に頼んだ。

庄屋も、その心をうれしく思い、役人をお願いして若者の願いをかなえてやることにした。若者は実によく働いた。だれもそうは思っていないのだが、一番末



能古島浦海岸より城の先を望む

写真は、大正6年11月3日 筑豊水産組合発行『大典記念筑豊沿海志』より

席の者として行動し、かといって卑屈でもなく、ようやく頑丈さを取り戻したその体が、夏の陽に焼けて黒光りするさまざまなど、男らしさの権化であり、島の娘たちの心をとらえるに充分であった。

おさよも例外ではなかった。しかも、若者はおさよに対しては下僕として仕えた。おさよがいくら頼んでもその態度だけは決して変えないのである。

能古にも稔りの秋が訪れ、たわわな稲の刈り取りもすんだころ、おさよは、若者を自分の聲にほしいと思っただ。若者に話したが、若者は決して自分の感情を表に出すことをしない。「庄屋様がそうせよと言われれば、その通りに致します」というだけであった。

おさよは自分の気持ちを父親である庄屋に話した。しかし、これは難しい問題であった。

そのころ、他国の者と縁を結ぶなどということは絶対に許されないことであり、島の掟でもあったからである。おさよは泣いて頼んだ。庄屋は頑として首をたてに振らなかつたが、三日ほどして二人を呼んだ。

「どうしても一緒にになりたいなら、この島を出なければならぬ。そして、再びこの島に帰ってくることもできない。また親子の縁も切らなければならぬが、それでもよいか」おさよの顔に喜びの色が流れ、おさよは、じつと若者を見つめた。若者は、しばらくの時間をおいて、静かに答えた。

「おじょう様を、ただかしてもらいます。どんなことがあっても、最後までお守りいたします」(次号へつづく)高田茂廣著「能古島から」より



昨年「第一回能古の風フォトコンクール」を開催いたしました。技術的なことよりも、能古島らしさを感じさせる写真を選んできました。能古島に何度も足を運んで頂き、島をゆっくり歩いて頂くことを……そう思って企画しました。

自然の花あり、魚あり、猫あり、……人あり、船あり、路地ありと、昨年は第一回目から思っていた以上にいろいろな作品が集まりました。こうして毎年続けていくうちに、蓄積された作品だけで、また、特別な企画ができそうです。いつかそのなかから絵ハガキでも作れたら……と夢はふくらみます。

尚、今年の応募作品もすべて十月五日より当館に展示の予定です。今年もぜひぜひご応募ください。

↑第一回能古の風フォトコンクール
入賞作品「能古っ娘」
福岡市中央区小笹一―一〇―二三
藤吉マツエさん

第二回 能古の風フォトコンクール 募集要項

テーマ 「能古の風」(能古島に係る人物・自然等 制限なし)

サイズ モノクロ、カラーとも四ツ切(ワイド四切可) 組写真不可

賞

- グランプリ 一点 五〇、〇〇〇円・賞状
- 準グランプリ 一点 三〇、〇〇〇円・賞状
- 特別賞 一点 二〇、〇〇〇円・賞状
- 入選 七点 一〇、〇〇〇円・賞状

その他・全作品平成十一年十月五日より十一月三十日まで当館にて展示。

- ・作品は未発表及び発表予定のないものに限る。
- ・住所・氏名・電話番号・題名(ふりがな)を明記した紙を裏面に貼付。
- ・入選以上は、原簿提出。
- ・作品は返却しない。

送り先 〒八一九一〇〇一
問合せ 福岡市西区能古五二二二
能古博物館

「第二回能古の風フォトコンクール係」

☎ (〇九二) 八八三―二八八七

締切 平成十一年九月三十日

発表 平成十一年十月月上旬直接通知

能古博物館だより

《法人協賛会員》

医療法人原土井病院 原 寛
ワタキユールセイモア

福岡メデイカルリース

福岡アーランドエム

福岡クリニカルデータサービ

福岡桜坂郵便局 鬼鞍信孝

福岡能古郵便局 西方 忍

福岡赤坂郵便局 戸田正義

日清医療食品(株)福岡支店

(株)福岡経営管理センター

(株)サンコー

医療法人恵光会 原 病院

(株)西日本銀行 和 白 支 店

千代町支店

香椎支店

土井支店

福岡流通センター

新宮支店

箱崎支店

久山支店

松本盛二南誠次郎 中山重夫

菅直登 早船正夫 浄満寺

奥村宏直 笠井徳三 荒木靖邦

沖 双葉 安陪光正 亀井准輔

熊谷雅子 石橋観一 木原敬吉

坂田貞治 庄野直彦 原田國雄

森光英子 永井 功緒 方益男

浦上 健 山本 稔 田中貞輝

《友の会会員》

武内隆恭 白水義晴 石野智恵子
翠川文子 多々羅節子 熊谷豪三
吉原湖水 矢富謙治

立石武泰 伊藤 茂 玉置貞正

水田和夫 木戸龍一 岡部六弥太

星野万里子 吉村雪江 安松勇一

上田良一 高田浩二 桑野次男

藤木充子 和田宏子 坂木継生

行成静子 鬼塚義弘 片岡洋一

石川文之 橋本敏夫 山内重太郎

都筑久馬 斎藤 拓 横山智一

古賀清子 宮崎 集 西 政憲

岡本金蔵 三宅碧子 星野金子

原 重則 岩下須美子 林 十九楼

宮 徹男 安永友儀 織田喜代治

上田 博 鶴田スミ子 塚本美和子

伊藤康彦 寺岡秀實 原田種美

奥田 稔 石橋清助 長 八重子

井上敏枝 隈丸清次 吉富とき代

浜野信一郎 岩重二郎 大山宇一

葉山政志 川島貞雄 岸 洋子

柳山美多恵 久芳正隆 半田耕典

武藤瑞こ 荘山雅敏 吉田洋一

永岡喜代太 古野開也 神戸純子

渡辺美津子 山田博子 佐藤泰弘

前田静子 飯田 晃 吉岡克江

黒川松陽 野田はつ 神戸 聡

林野祥子 田里朝男 吉田一郎

池田修三 黒田喜美子 岩谷正子

小川正幸 権藤菊朗 藤野清春
井手俊一郎 増田義哉 宮嶋熊太郎
土井千草 松坂洋昌 稲永 実

鹿毛博道 古川映子 松井俊規

衛藤博史 伊藤泰輔 田代直輝

西村蓬頭 執行敏彦 坂井幸子

渡辺千代子 後藤和子 脇山涌一郎

川浪由紀子 川田啓治 足達輔治

中村ひろえ 古賀謹二 野尻敬子

結城慎也 大野幸治 榎田正己

青木良之助 神崎憲五郎 金子柳水

佐野 至 井手 太 宮崎春夫

鬼丸碧山 黒川邦彦 山崎エツ子

小山元治 吉瀬宗雄 古賀義朗

西山正昭 古賀邦靖 市丸喜一郎

豊島嘉穂 庄野陽一 守瀬孝二

樺島政信 鋤田祥子 甲本達也

田本政宏 鳥井裕美子 濱北哲郎

大塚博久 小山富夫 前田敏也子

辻本雅史 松田 清 杉浦五郎

中野晶子 大谷英彦 野崎逸郎

住本 霞 山根ちず子 村山吉廣

住本直之 井上恵美 大島節子

間所ひさ子 伊藤英邦 鹿毛光子

古賀朝生 林 正孝 井上雷策

田中寛治 土屋伊雄 白井重儀

原 礼子 小堀百合子 原 康二

原 牧子 杉みどり 原 祐一

山下清久 杉原正毅 大久保昇
党 隆雄 福澤昌弘 小嶋幸雄
福本孝行 樋口陽一

※新規の御加入(先号以後、平成十一年七月十五日現在)は、記載いたしてお

りますので、何卒ご芳名をご確認ください。

ありがとうございます。

友の会 年間3万円

(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人)年間1万円

〃(法人)年間3万円

〔館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける〕

納入方法 郵便振替 0173019160970

財団法人 財団法人 亀陽文庫能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜日が祝日の場合は次の日)
冬季休館 12月1日→2月末日まで
入館料 大人400円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2887
FAX(092) 883-2881